

新型コロナウイルス禍での遠隔授業における グローバル体験の効果と可能性について

宮 武 香 織*

要 旨

新型コロナウイルス禍に実施された遠隔授業で、海外の英語および英語音声学担当の大学教員を専門演習（2年生ゼミ）にゲスト講師として招くことができた。本稿では、受講したゼミ学生およびゲスト講師の感想から、遠隔講義下でのグローバルな体験授業の可能性を探った。受講後数ヶ月を経ての学生の感想は、6割強の学生が英語を学ぶ上で影響があったと回答した。「今後も海外の教員にzoomで講義を受けたいか」という問いには8割強の学生が受けたいと回答した。コロナ禍で海外留学の道は閉ざされたものの、実際に出向かずともオンラインで海外の大学教員の講義を受けた学生の満足度は高く、その後の英語学習において何らかの変化が生まれたことが示された。

キーワード：新型コロナウイルス、遠隔授業、グローバル、国際交流、海外留学

1 はじめに

九州国際大学現代ビジネス学部国際社会学科では、「国際社会科学や異文化理解の知識及び学内外での様々な体験を社会で活かしたいという目的意識と意欲がある」学生が卒業時には、「国際社会科学や異文化理解の専門知識及びそ

* みやたけかおり、九州国際大学現代ビジネス学部、miyatake@kiu.ac.jp

の活用方法を身につけて」「国際コミュニケーションの手段として必要な、英語や韓国語を中心とした国際対話能力を身につけている」ことを想定してカリキュラムが組まれている。2020年度には第2年次から第3年次にかけて海外語学実習・海外社会実習が選択必修科目として開設され、上記のポリシーを実践すべく、海外で学んでくる機会が与えられている。

筆者の担当する専門演習Ⅰは、英語音声学に特化しているが、言語音を学ぶということはコミュニケーション能力の質の向上に直結しており、上述した本学のアドミッション／カリキュラム／ディプロマ・ポリシーの実現に密接な関係があると考えられる。そこで音声科学の知識と実際の英語発音法の習得が、続く海外実習への下準備としての機能も含むよう実践練習を多く含んだ講義計画を立てていた。

しかし新型コロナウイルス感染症が地球規模で蔓延した2020年度の前期は、福岡県での新型コロナウイルス対策特別措置法（正式名称：新型インフルエンザ等対策特別措置法）に基づく「緊急事態宣言」の発令により、本学園はICTを活用した遠隔授業やオンデマンド授業での新学期開始となった。

2 出来なくなったこと・出来るようになったこと

瀬田・村上・後藤田（2020）によると、この新型コロナウイルス感染症が教育現場に与えた影響は、地球規模であり、「4月25日現在で、世界全体のおおよそ90%にあたる15億人以上の子供たちが学校に通えなくなったとの報道もある。」と記述している。つまり世界で英語を教えている教員たちも同じように遠隔授業に入り、自宅からインターネットを使用した講義に変更することを余儀なくされていた。

未知の感染症と初めての遠隔授業による不安から、筆者と海外の教員仲間との間では情報交換の回数が急激に増した。しばらくすると共に使い慣れてきたzoomでの定期的な会話も劇的に増えることになった。そこから授業のアイ

ディアが生まれ、互いの講義にゲスト参加を依頼することもこれまで以上に容易くなった。

筆者の専門演習Ⅰでは、ゼミ生の半数が年度中に海外語学実習・海外社会実習に参加する予定であったが、2020年度はどちらの実習も閉講となった。いつ開講されるのかも分からない状況にゼミ生たちは不安と不満を口にしていった。そこで実習の代替とはならないものの、演習に海外の英語（音声学）教員をゲストとして加えることで、海外実習再開までの動機と意欲の繋ぎの一助にならないかと考えた。5か国から教員計5名と日本人1名にゲスト参加を打診したところ、快諾された。筆者もこれまでゲストで彼らの講義に参加しており、互いに無償で参加することは暗黙の了解ではあったものの、国によっては大きな時差があることを考えると、全員から二つ返事で承諾してもらえたことは有難いことであった。

新型コロナウイルスが猛威を振るっている特殊な状況下、直前の依頼にも関わらず海外の教員たちをゲストに呼ぶことができたのは、「友の頼みは断れない」からだけではない。教員として、1）遠隔授業になったことで生活スタイルが大きく変化し、時間に余裕が生まれたこと、2）渡航の必要なく海外の大学生に英語で講義をする機会は、断るにはあまりに興味深かったからだろう。これらの幸運な要素が重なり、今回の専門演習での海外4大学と1高校の教員によるオンライン講義が可能となった。

3 ゲスト講師による専門演習の概要

2020年前期、全15回中5回を海外の高校・大学で英語・英語音声学を担当している教員たちのゲスト講義に割り当てた。大まかに決めたテーマに沿って講義時間90分のうち実質70分での講義を依頼した。講義はzoomを用い、資料提示方法としてパワーポイント・インターネットなどが使われた。主な内容は、各々の国の紹介や、日本への関心と日本旅行の感想などをはじめとして、

自らの留学経験・英語を学んだ経緯など、ゼミ生たちの関心事に寄せたトピックを中心に話してもらうこととした。ゲスト教員は講義の最後に講義後クイズを実施することで学んだことを再確認できる工夫をした。英語音声学の超分節がトピックの回には、変則的にゼミ生（全員が音声学の受講生である）だけではなく音声学受講生も受けることができるように英語音声学の授業枠に設定した。この回と ear training を含んだ回には、本学から教員の参加・見学もあった。最後の回には、欧米企業での勤務、および金融庁での新興国国際協力の仕事などに加え、数多くの海外渡航経験を持つ日本人ゲストが学生時代の留学経験とその意義についての話をした。このゲストが数日前に母校で行ったばかりの講演内容が、本学の学生に取っても非常に有意義な内容であると判断し、急遽当ゼミで同じ内容での講義をお願いすることにした。

講義に際して、各ゲストたちとSNS上にゼミ用のグループを立ち上げた。その場で情報共有と意見交換を繰り返し、密に連携を取ることで、講義の流れの一貫性が失われないよう工夫することが容易になった。さらに日本と海外で日本人大学生を指導した経験のある教員からのアドバイスは他のゲストが心構えを作る上で重要な役割を果たした。

学生には毎回のzoom講義中、必ず一回は講師に口頭で質問することを課題とした。zoomでは発言者がアップに映る画面設定であったため、一対一で対話するような錯覚が作りやすく、Q&Aを効果的に使用できると判断した。さらに学生には、講義後に感想を提出することと、講義終了後には迅速にメールで礼状を出すことが課題とされた。

表1 ゲスト講師の出身国・現職と今回の講義トピック

開催日時	教員の出身国	教員の現職	今回の主な講義内容
5月23日	アルゼンチン	教育大学教員	日本への旅行・母国の歴史・質疑応答
6月17日	韓国	言語文化研究所所長	日本での教員生活・海外留学に関して・質疑応答

6月23日	ポーランド	高校教員	住む街の歴史・高校の紹介・クイズ
6月30日	チェコ	教育大学教員	英語の超分節に関して
7月15日	コロンビア	大学教員	コロンビア・留学・ear-training
8月4日	日本	外資系企業 リスクマネージャー	ダイバーシティ・マインドセット

4 講義後のゲスト講師の感想

講義後、日本人学生を教えた経験のある一人を除いた全員が、日本人学生の反応の薄さに衝撃を受けたという。講義中の反応の薄さが、必ずしも無関心や内容を理解していないことの反映ではないと既にアドバイスを受けていたにも関わらず、実際に学生からの礼状を読むまでは、理解できていなかったわけである。拙い英語での礼状ではあってもゲスト全員にとっては初の日本人学生ひとりひとりからのフィードバックという大きな意味があった。学生の礼状に感激した彼らは一様に、「機会があれば又いつでも講義をしたい。」または「学生に招待されたのでいつか必ず大学に出向いて対面で講義をしたい。」などと前向きな約束をしてくれた。

のちにゲスト講師陣に感想をメールで提出してもらおうと下記のような回答がきた。短い時間ではあるが互いの国の紹介や簡単な対話を通しての国際交流は、学生だけでなく普段日本に全く縁のない教員の側にとっても画期的な出来事であったといえよう。

“I think this experience was wonderful, not only because I had the opportunity to work with a group of students of a country I admire, but also because I had the pleasure to exchange ideas with a very nice colleague. I think this kind of ideas give the chance to broaden student's minds. They could listen to other kind of accents and intonation and they also could learn a little bit of

other countries' culture. All in all, I think this was a very enriching process of learning for this marvelous group of students.”（アルゼンチン）

“The guest lecture was a great opportunity for me to interact with Japanese university students again. They were very attentive and appeared to be a bit reserved at first but when called individually they all had an excellent question each. One of the questions was about what I thought about the current tension between Japan and Korea personally. I answered that there are some issues still remaining to be resolved between the politicians of both countries but that on the civilian level Korean people have no hard feelings towards Japanese people and we hope Japanese people feel the same way. Some other questions were about my personal experience in Japan as an English teacher and my experience living in other countries-New Zealand, the US and the U.K. Students were curious about my experience and asked questions as well. All in all, the lecture was an opportunity for great cultural communicative exchanges. After the lecture, each student sent me a thank-you email, which I thought was a great way to experience a direct communication in English. Doing the same thing or similar with all other guest lecturers must help the students boost their confidence and also expand their perspective in learning English as well as about various cultures.”（韓国）

“It was a unique experience and a great pleasure to give a lecture to Japanese students via Zoom platform. In the times when coronavirus pandemic kept us locked down, it was like an opportunity to travel the world for me. And in return, I decided to show ‘my world’ to the students in Japan. I took them on a trip. Using Zoom and various digital tools I presented my town, Wałbrzych, its beautiful surroundings, troubled history and most precious tourist destinations. I

also mentioned the Gold Train mystery that attracts treasure seekers and caused worldwide attention a few years ago. The students learned a bit about the coal mining history of my hometown encapsulated in the modern museum ‘Stara Kopalnia’ (Old Mine). They virtually visited our ‘pearl’: Książ Castle and heard why many hope to find valuables buried on the outskirts of Wałbrzych. Since being a teacher always tempts me to check what the students have learned from my lecture, I prepared a short quiz for my Japanese participants, which they did quite well, I must say. The students seemed involved in the meeting and actively participated in the quiz. We also had a round of Q&A when I was asked some more or less surprising questions; a few of them connected with my presentation (and yes, I was asked if the gold train had been found yet!). From my perspective, conducting this online class for Japanese students was an interesting experience – didactically, technologically and culturally. I had a glimpse at young people so similar and so different at the same time comparing to my Polish students. I was impressed by their politeness and discipline. I could see what topics or forms of presentation may work well and how I can cope with such kind of distant teaching. Thank you so much for giving me this opportunity.”（ポーランド）

“It was an amazing experience. First, I enjoyed students’ positive attitude towards the lesson and their effort to listen and utter the vowel sounds. I loved their thank you letters; they were quite inspiring. Second, we could talk about some cultural differences between Japan and Colombia. I believe it’s quite important to make these sorts of contrasts when you learn English. Finally, I could learn a bit about Japanese phonology and L1 transfer, which is different from my Colombian students. In short, it was a very enriching experience.”（コロンビア）

5 学生の反応

後期、対面授業が始まったことで、ゼミの学生たちがグループで活動する機会も生まれ、ハロウィーン、クリスマスといった季節のイベントや、学生自身が企画・交渉に参加してのJICAとの交流会、近隣の小学校でのボランティアなどを次々と経験した。しかしながらこのような、前期を踏まえての後期の実践活動も途中から再度の遠隔授業に移行したことで中断してしまった。そこで2020年度の最後に、ゼミ生が前期の海外の教員から学んだことをどう消化したのかgoogle formsで簡単なアンケートを取ることで、教員、学生ともに振り返りをおこなった。

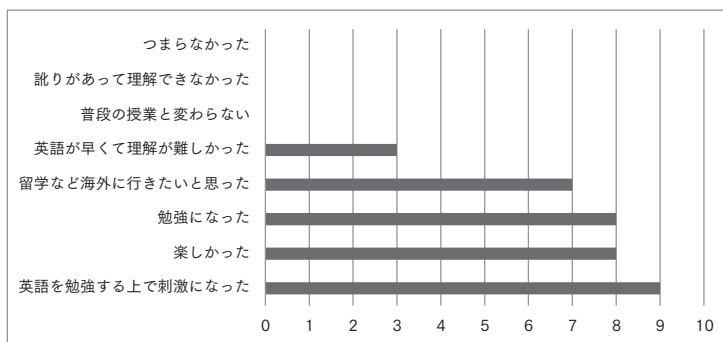


図1 「zoom で海外の先生に習うことは」の回答 複数回答可

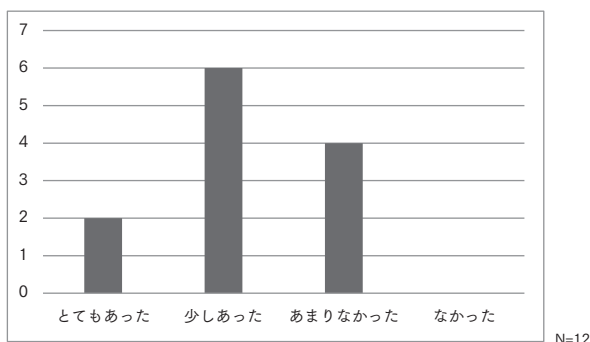


図2 「海外の先生の講義を受けた後、英語を学ぶ上で何か変化がありましたか」の回答

表2 変化があったと回答した理由 N=8

イントネーションなど普段あまり学ばないことを学べば意識するようになりました。
英語の違いに興味を持った
もっと英語を学ぼうと思った 文章力などではなくてもコミュニケーションが取れるのだと感じた
様々な国の人とお話した事で海外に対する考えが少し変わった
いろいろな国の訛りがあるのを知れたおかげで 海外の人の英語を話すのを見たり聞いたりする時はただ聞いて見ていたのが、その国独特の英語の発音を聞きながら楽しめるようになりました。
単語力をつけないといけないと感じた。
イントネーションなど普段あまり学ばないことを学べば意識するようになりました。
アメリカ英語とイギリス英語の発音ははっきりわかりました。
英語の違いに興味を持った

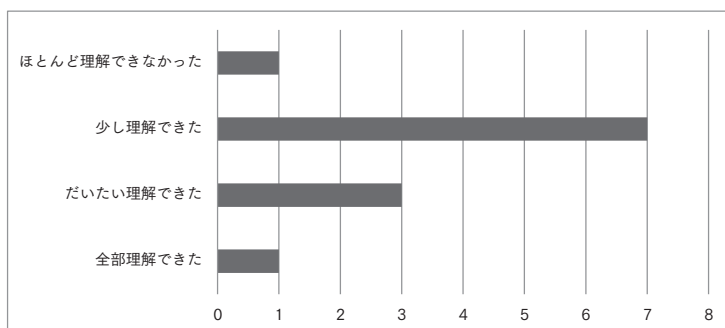


図3 「前期の海外の先生の講義は内容が理解できましたか」の回答 N=12

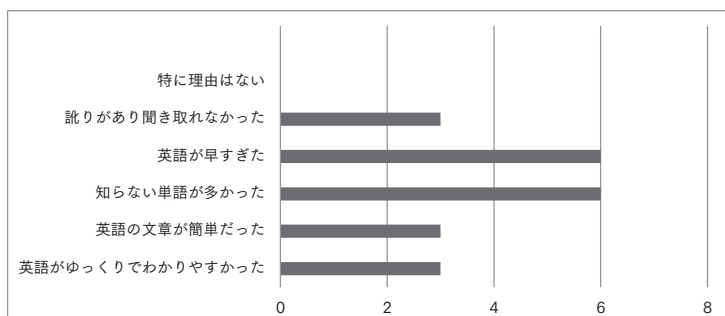


図4 「理解に関して、その理由はなぜですか」の回答 複数回答可

表3 「前期に海外から5人、日本から1人のゲストの先生の講義で一番印象に残っていることはなんですか」に対する回答（N=12 無回答4）

エドウィン先生
New Zealand のことを気になったので、先生が教えてもらって、よかったです！
コロンビアの先生に発音がいいと言ってもらえたこと
韓国の先生の英語が1番聞き取りやすかったこと。
男性の先生に来ていただいた時に、シャイな私たちでも参加できる形式で授業してくれた
留学のことについて聞けたこと
覚えているのは英語のアクセントみたいなやつです。

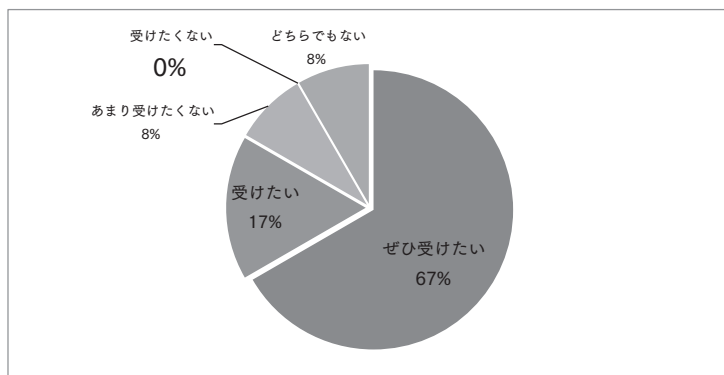


図5 「今後も海外の先生に zoom で講義を受けたいですか」の回答 N=12

表4 「上記の理由」の記述回答（N=12 無回答4）

いろんな先生から世界の英語を習いたいからです。
留学ができないなか、外国の先生に講義してもらうことは留学前の勉強としても、とてもいい経験になると思うから。
いろんな国の英語音声学を知りたいからです
実際に話を聞くことで何か役に立つものがあるかもしれないから
少しずつでも、英語に慣れたいと思ったから。
留学に行きたくても行けない人もいる中で zoom でのオンラインでも繋がれることができれば、私たちにとっていい刺激になって糧になると思う。国際大学というからには交流をしていきたいと思うから。
海外のことを詳しく知りたいし、英語にたくさん触れたい
ほんの少しだけ理解はできるけど理解できてないことのほうが断然多いから、受けてもそんなに意味が無いように感じる。でも経験にはなるかなという感じ。

6 考察

enrich/opportunity/culture/exchange/experience/inspiring など、ゲスト講師の感想に共通して現れたこれらの単語は、この演習がゲストにとってはオンラインで海外の学生を教えるまたとない機会であり、文化の違いを互いに実感し合うことができる、教員として鼓舞される経験だったということを示唆している。

一方、学生の83%が今後もzoomでの海外の教員の講義を受けたいと回答した。記述回答では、「いろんな先生」「いろんな国」「外国の先生」「様々な国の人」「英語にたくさん触れたい」「国際大学というからには」等、大学に国際大学としての「多様性」を求めていることが示唆される語句が並んだ。学内で日本人教員、英語母語話者の教員たちから学ぶことにプラスして、海外の教員からオンラインで学ぶことにも価値を見出していることが示された。

今回の講義内容の理解度は6割強の学生が少ししか理解できなかったと感じていた。今後も海外からのzoomも講義を受講したいかとの問いに否定的だった2回答を個別に見てゆくと、1名が、「英語が早すぎた」「ほとんど理解できなかった」と回答しzoomで海外の教員から習うことは「英語が早くて理解が難しい」ので、今後、海外の先生の講義をzoomで受けることに関しては、「あまり受けたくない」「対面で受けたい」との回答であった。講義後の英語を学ぶ上で何か変化はあったかとの問いには「あまりなかった」と回答している。もうひとりの学生は、今回の講義は「知らない単語が多すぎた」「英語が早かった」などの理由から「楽しかった」が「理解が難しかった」と回答し、受講後の変化も「あまりなかった」のは「ほんの少しだけ理解はできるけど理解できていないことのほうが断然多いから、受けてもそんなに意味が無いように感じる。でも経験にはなるかなという感じ。」と記述し、今後も海外講師にzoomで受講したいかどうかは「どちらでもない」に回答している。この2名に共通しているのは自らの英語理解力の足りなさの自覚と更なる受講には否定的な点であ

る。「早くてわからない」から「今後は受けたくない」という短絡的な考え方は、このzoom講義を継続して受講し、内容理解の度合いが高まった際には好意的な回答に変化するのか、理解力と動機付けの関連に関しては引き続き調査する必要があるだろう。

自身の理解度を「少し」と厳しめの自己評価をする学生が7人で、1人はほとんど理解できなかったと回答しているにも関わらず、講義は「英語が早くて理解が難しかった」という感想は2割に過ぎない結果となった。残りの8割は「楽しく、勉強になり、英語を勉強する上で刺激になって、留学など海外に行きたくなった」と回答した。「つまらない」「普段の授業と同じだ」という感想はゼロであった。これらの回答から学生の満足度は非常に高かったといえよう。

7 おわりに

インターネットが普及し、あらゆるプラットフォームからグローバルにコミュニケーションを取ることが可能になってはいたものの、新型コロナウイルス感染症が世界規模で爆発的に蔓延し、教育現場がオンラインと化したことであらためてその恩恵を講義に活かすことができた。世界各国から英語教員を2年次の専門演習に招くことができたのは大きな収穫であった。学生の満足度も高く、この結果をもとに、後期の海外実習の代替コースが作られたことから、コロナの逆境が産んだ有意義なimprovisationであったといえよう。

今回のゲストは、日本在住の英語圏「ネイティブ」教員ではなく、世界5カ国からネットで繋がった、現在自国で英語を教えている教員たちである。留学の機会は失われたが、インターネットなら、英語圏だけではなく、縁さえあれば世界中の英語の講義を受けられることを、学生たちは体験した。この経験はコロナ禍にあっても、自らの国際経験が中断されるわけではないという希望と自信になっただろう。当ゼミ学生は後期になっても、ゲスト教員と連絡を取り

続け、一方的な願い事や質問の形ではあるが交流が続けている。ゲスト講師たちは、この学生たちにとっては、単なる一過性のゲストではなく、もはや九州国際大学の教員と分け隔てない彼らの「先生」なのである。

謝 辞

今回、話の流れで「やる？」「OK」といった軽いノリであったにも関わらず、スケジュールに組み込むや否や、時差にも負けず、何度もグループで話し合いを重ね、できる限りの入念な準備をして挑んでくれた世界に散らばる distinguished contributors: Claudia Aurora Pennacchini (Universidad Nacional de la Matanza), Edwin Zapata Ortiz (Universidad Nacional de Colombia), Emi Takahashi (Governance & Southeast Asia Expert/Consultant/Lecturer/Translator), Irena Kalischová (Masaryk University), Marzena Jerczynska (Nicolaus Copernicus Secondary School No 3 in Wałbrzych), and Young Shin Kim (Young Shin Kim Language and Culture Laboratory) の各人に心からお礼を申し上げます。そして、このゼミの内容変更に快く後押しをしてくださった国際センター長 福西和幸教授には、ここに改めて深く感謝申し上げます。また、筆者の英語音声学研究において指導に当たって下さり、本校執筆に於いても御助言を頂いた、都築正喜博士（元日本英語音声学会長、President of the English Phonetic Society of Japan, EPSJ）に衷心より感謝申し上げます。

【参考文献】

九州国際大学 (2020). 「学生便覧」. 4－7.
瀬田和久・村上正行・後藤田中 (2020). 「レジリエントな学びを支える実践的取り組み－新型コロナウイルスへのオンライン授業対応－」『教育システム情報学会誌』 37 (4) 236-238.

【参考サイト】

北九州市ホームページ. 「市長メッセージ (4月7日・緊急事態宣言を受けて)」 <https://www.city.kitakyushu.lg.jp/soumu/k15700102.html> (2021年1月5日最終アクセス)

